地名に残るタタラ場の痕跡

戸谷　克己　著　（飯能市房ヶ谷戸）

名は体を表すというように、地名はその場所の地形や生活や文化等を表している。日本の地名は、青梅や日高や秩父や飯能のように漢字二文字で表わされるものがほとんどである。

それは、奈良時代に政府の通達で、中国の地名の表記法に倣って命名されたことによる。ただ、発音に漢字の音を当てたので、日本の古代語では「出っ張っている」という意味の「いずる(半島)」や「えつ(岬)」に、伊豆や江戸という字を当てたので、漢字音からでは意味が全くわからないものになってしまっている。

だから、使用されている漢字の意味によって地名を読み解いてしまうと、その意味や由来を誤って解釈してしまうことになる。

私は一昨年の春に、飯能市の原市場の房ヶ谷戸に転居してきたのであるが、家の近くのバス停はあまり聞きなれない「赤工(あかだぐみ)」という名称であった。「赤工」の「赤」は鉄のことを「工」はそれを精錬して鉄製品を製作する「鍛冶師」のことを意味している。それは、この近辺で製鉄や鍛冶の仕事がなされる場があったということを示している。

そのことに関連するかのように、転居する直前に飯能周辺の地図を見ていた時に、阿須や加治や笠縫といった製鉄に関連する地名が幾つも出ていたということに気付いたことを思い出した(西武池袋線の「飯能」駅の隣りは「元加治」という駅であった)

私は以前から民俗学に興味を持っていて、そのことから地名に対しても深い関心を抱いていた。

「阿須」とは古代語で砂鉄(アス、アソ、アサ)のことを、「加治」はまさに鍛冶＝タタラ場のある所を、「笠縫」は古代の物部氏に属する曲部(かきべ)の一つで鍛冶にも関わりのある集団の名前を示す地名であった。

（因みに「飯能」という地名は、飯能の隣りの高句麗の入植者によって開発された「高麗」郷があるところから朝鮮語の「一」あるいは「大」を表す「ハン」と国を表す「ナラ」との合成語である。

「ハンナラ」＝「ハンノウ」という説と、古代に飯能を開発した秦氏の「秦」に木偏を付けた「棒」が音読みされ、「秦野(ハタノ)」が「秦野(ハルノ＝ハンノ)」となり、さらに「野」に万葉仮名の「能(ノ)」が当てられ、それが音読みされて「飯能」になったか、または秦野氏の集団は職人や芸能者として活躍し、鍛冶や鋳物の職人も

多数輩出していて、その職人や芸能者を表す「能」が「棒」に付いて「棒能(ハタノウ)」になり、それが音読みされて「棒能＝飯能」になったという説があるが、私としては後者の秦氏に関連して飯能になったという説を支持したいと思う)

「赤工」というバス停の名称から連想したように、名栗(入間)川を挟んだ対岸にはタタラ場があった事を示す「金山」という地名が存在すると共に、「金生(カナウミ)」が語源変化したと思われる「叶(カノウ)」神社があった。

また、神社の参道の入口辺りの名栗川が大きく蛇行する場所が「聖天淵」と呼ばれており、そう呼ばれるようになったのは、その淵に臨んで立っている巨岩の上に聖天様を祀った祠(ホコラ)があったからだという。その祠に祀ってあった聖天様の像は、大洪水で一度祠ごと流されて、その後その近辺の砂の中から発見され、今では「歓喜天」という扁額が懸けられた叶神社の祠に祀ってある。九月三十日の例大祭の開帳の折に五センチ程の鉄を鍛造(タンゾウ)したものと思われる小さな像と四十センチ程の木彫の聖天様の像を見る機会を得た。

聖天様＝歓喜天とは、元はヒンズー教の神で後には仏教の守護神となったガネイシャと呼ばれる象頭入身の形をした単身と双身の仏像なのであるが、双身のものは男女和合の姿をしていて、叶神社に祀ったあったものは男女が交合した双身のものであった。

ただ、小さな像は象頭入身ではなく、平安時代の貴族階級のような長い髪すべらかした女性と鳥帽子を被った男性が交合している。歓喜仏としては珍しい特異な形をした像であった。

タタラをホトやフネといった性的な名称で呼んでいるように、古代人は生殖と金属の生成を同一視していたために、金属の精錬に関わる人達は、その象徴として歓喜天を祀るようになっていったのであろう。

これらの「金山」や「叶」や「聖天淵」といった地名は、まさにここにタタラ場があったという事実を確実に物語っている。

(その他にも、祠の階段の下には、「聖皇太子」と刻んだ男根の形をし、その中央には陰部のような窪みを持った石碑が立っていたが、聖皇太子とは聖徳太子のことで、この石碑からも確実にここに「赤工」がいたことを物語っているのである。)

この地が隆盛を誇ったのは、隣の房ヶ谷戸にあった西光寺の巨大な四基の板碑の年号の正元二(一二六〇)年で、最後が正和四(一三一五)年であることから、武士が政治権力を握った平安末期から鎌倉・室町時代に掛けてであったということを推測出来るであろう。この地は、武蔵七党と言われる関東武士団の重要な武器の供給地であったと思われる。武蔵七党の内、丹(丹治)党や村山党は製鉄や精錬の技術に長けており、加治丘陵には丹党の加治氏や村山党の金子氏がいて、そのような人達の関係者が、この「金山」の地でタタラ場を営んでいたの

ではないだろうか。

「砂鉄七里の炭三里」という諺(ことわざ)通り、阿須山近辺の良質な砂鉄とこの周辺の炭を使い、タタラ場に必要な強い風や豊富な水に恵まれている。この「金山」の地で刀を初めとする様々な武具を製作したのであろう。

それに、例大祭の折りに氏子の方から、かつては「金山」の人達が講を組んで榛名山や武蔵御嶽山に出掛けていったという話を聞いた。

後で調べてみると、榛名山は迦具土(カグツナ)命を御嶽山は大己貴(オホナムチ)命と櫛真智(クシマチ)命を祭神とする神社があった。

迦具土は産鉄や精錬の神である金山彦、金山姫に関連する火の神で、大己貴は砂鉄の地である出雲の神、櫛真智命は祖神が金屋子神＝天目一箇(アメノマヒトツノ)神であり、これらの神は皆鍛冶に関連する神であった。

これらのことからも、この「金山」の地が、鍛冶と密接な繋がりがあったということが分かるのである。　(戸谷)